看護婦の部屋

Ms. Kokuro's house by David Harris

まぶしい朝が来た。三十五歳の会社員である信男は、慌ててベッドから飛び出した。時計を見る。すでに七時半。

「やべえ、遅刻じゃん！」

彼はブリーフケースをつかんでドアの外に出で、駅まで走った。

「混んでるなあ……」

人並みをかき分けながら、信男は焦った。遅刻なんかしたら、上司になんていわれるか。焦りが、信男の視野を狭くしていた。不意に、何かにぶつかり、眼の前が真っ暗になり、同時に凄まじい激痛がこみあげてきた。

「ぎゃあああ！」

信男は絶叫していた。

彼は、女の子と正面衝突し、そのはずみに、彼女の膝が股間に入ってしまったのだ。

「ごめんなさ〜い！」

二十歳半ばくらいか、ラフなタンクトップに、ジーンズのミニスカート、ブーツといった出で立ちの彼女は、うずくまった信男の傍らに身を屈めて謝った。

「立てますかぁ？」

「え……なんとか……」
「痛いんですかぁ？」
「え……ええ……」
彼女は手を延ばし、信男を立たせようとした。そのはずみに、信男のブリーフケースに躓き、よろけてつんのめり、信男の股間に膝をぶつけてしまった。柔らかな肉の玉が、剥き出しの膝小僧でぐしゃりと変形したように感じた。
「ぎゃあああああああああ！！！」
信男は絶叫した。女の子は、両手で口を押さえ、周囲を見回した。大勢の通勤客が、なにごとかと、床にうずくまった二人を見ている。
彼女は慌てて立ち上がった。
「あ……ごめんなさいね。あの……痛いでしょうけれど、とりあえず、立ちません？」
今度は、なんとか立たせることに成功した。信男は、膝ががくがく震え、今にも倒れてしまいそうだった。
「あの……歩けます？」
「いや……だめ、みたい……」
「えと……どこがとくに痛いんですか？」
「そ、それは……その……股間が……」

女の子が眼を見張り、口を大きく開けた。
「ええー、股間！」
周囲の客が一斉にこちらを見た。信男はさすがに恥ずかしくなった。
「大丈夫……会社にいかなきゃ……なんとか歩けるし……」
よろよろと歩き出した信男を、女の子は引き留めた。
「だめですよぉ、そんな会社なんて！」
「でも……遅刻しちゃうし」
「だめです。あ、うちに来ません？　このすぐ近くだし、そこで休んだらどうですか？」
「でもあの……」
「私、看護婦なんですよぉ、夜勤明けで時間あるし……。ロータリーまでがんばって歩いて下さいね、タクシー拾いますから」

数分後、結局、信男は彼女のマンションで、カウチに腰を沈め、苦しげに喘いでいた。
「ゆっくりしてて下さいね」
彼女は楽しげに鼻歌をうたいながら、キッチンでタオルを冷たい水に濡らし、運んできて、額に当てた。そこはまったく痛んでいなかったのだが……。
「お名前、なんていうんですかぁ？」

「あ、上村です……上村信男……」
「私、理沙です。小久保理沙」
理沙は、タオルを、信男の股間に当てようとした。
「痛いの、ここなんですよねぇ」
信男は驚き、思わず腰を浮かせた。
「あ、立っちゃだめですよ！」
理沙は、叱りつけるように言った。
「座ってなきゃ、だめじゃないですかぁ」
「す、すいません」
信男は、思わず謝り、座った。
「じゃ、痛いところ、見せてもらえます？」
理沙は、笑顔に戻って言った。信男はきょとんとした。
「え？」
「痛いとこ。だって、まず、どんな状態が見てみないと」
え、え、え！　理沙は、仰天する信男のベルトに手を掛け、バックルを外し、あっという間にズボンを脱がせてしまった。
信男はブリーフ一つになってしまい、赤面して脚を閉じた。茶髪の若い、しかも可愛い女の子

に、股間を見られるのは恥ずかしかった。
「あの……それも脱いでくれませんか」
理沙は、脚を閉じてしまった信男に、不服そうな顔で言った。
「でも……」
「でもじゃありません！」
彼女は、聞き分けのない患者を叱りつける調子で命令した。
「ちゃんと見せてくれないと、手の施しようがないじゃないですかぁ」
信男は仕方なく、脚を開き、腰を浮かせた。理沙は、慣れた調子でブリーフを脱がせ、いきなり陰嚢を手で掴んだ。
「ぎゃあああ！」
あまりの痛さに悲鳴をあげてのけぞった。
「あら、そんなに痛いですか？」
理沙は、心配そうな口調で、しかし何故か笑顔で言った。
「緊張しないでくださいね。ちゃんと治してあげるから」
言いつつ、理沙は、そっと陰嚢を掌に載せた。信男はふと、彼女の眼が、ぎらぎらと輝いているのを見た。
まるで、獲物を前にした狼、いや悪魔……。

信男が、彼女の手を振り払おうとした瞬間、その手がぎゅっと、強く陰嚢を握りしめた。

信男の全身が、数十センチも跳ね上がった。

「ぐわぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

部屋中に絶叫がこだました。

「ごめんなさいね、信男さん」

理沙は、微笑みつつ、陰嚢を握ったまま言った。

「私、男の人の睾丸を、こんなふうにするのが、大好きなの」

信男の髪が総毛立ち、全身から血の気が引いた。

「ちょ、ちょっと……」

立ち上がろうとしたとき、理沙は、左手で陰嚢をつかんだまま、右手で信男のペニスを握りしめ、上下に優しくしごきはじめた。信男のペニスは硬く勃起した。すると理沙は、烈しくしごき、皮が熱くなった。

「い……いったい、なんなんだ！」

信男は苦痛と快楽に喘ぎつつ、わめいた。

「き……君は変態だ！」

手を延ばし、彼女の手を払いのけようとした。すると、理沙は、右手をペニスから離し、拳を

固めて陰嚢にパンチをぶち込んだ。

もはや叫ぶ力もなく痙攣する信男に、理沙は冷たく言い放った。

「余計なことすると、こうだよ」

再び、理沙は、信男のペニスをしごきはじめた。言い難い睾丸の激痛にもかかわらず、信男のペニスは勃起したままで、やがて、射精の兆しが起こった。

理沙の頬が赤く紅潮し、眼が潤んでいた。腰のあたりが、もぞもぞと動いていた。陰部が濡れているに違いない。

理沙はゆっくりと、睾丸を指で圧しはじめた。信男の口から、苦痛の呻きが漏れ、次第に大きくなった。男を苦しめている快楽に、理沙は眼を閉じ、息遣いは荒くなった。

「ああ……」

彼女の口からため息が漏れると同時に、睾丸をつかんだ指に凄まじい力が加わった。

「ぎゃあああ！！！！」

信男が絶叫した。同時に、ペニスの尖端から精液が迸り、理沙の顔まで届いた。

「なにすんのよ、馬鹿！」

理沙は怒りの叫びを発した。信男のネクタイをつかんで引き起こし、思い切り、股間を膝蹴りにした。

「うきゅう……」

信男は眼を見開き、口を開け、喉から奇声が漏れた。
「信じられない！」
理沙は、信男を床に突き飛ばした。仰向けにひっくりかえった信男の右の睾丸に踵を乗せ、全身の体重をかけた。
ぐしゃ！
いやな響きと同時に、信男は意識を失った。

やっと意識を取り戻した時、そこは病室らしかった。
白いシーツのベッド。窓には白いカーテンが引かれ、壁は殺風景な白。少し離れたところで、白衣の看護婦が、こちらに背を向けて何か作業をしていた。
「あら、眼が醒めました？」
看護婦が顔をこちらに向けた。まだ股間の激痛は治まらず、視界は霞んで、よく見えなかった。
「残念ですけど」
看護婦は、やや俯き加減に言った。
「……え？」
「睾丸が一つ、破裂しています」
信男は、看護婦の言葉の意味がとっさに飲み込めなかった。

「あの……破裂って」
「……でも、大丈夫です。一つあれば、十分、機能しますから」
睾丸が一個……潰された。
ショックと同時に、脳を覆っていたもやもやが晴れ、視界が鮮明になった。
看護婦がこちらに近づいてきた。唇が歪み、不敵な笑みが浮かんでいた。
「もちろん、もう一つも、じきに破裂しちゃいますけどね」
信男は上半身を起こした。看護婦は……理沙だった！
周囲を見回した。確かに病室らしい内装だが、開いたドアの向こうに見覚えのあるカウチ。
そう、ここは理沙のマンションなのだ。
理沙の体が跳躍した。彼女はベッドに飛び上がり、いきなり、信男の股間に顔を伏せた。信男は、全裸だった。剥き出しのペニスを口に含み、歯を食い込ませた。
「ぎゃあーーーー！！！」
信男は絶叫した。理沙は顔をあげた。その唇から、血が垂れていた。彼女は、白衣のポケットに手を突っ込み、何やら取り出した。
金槌だった。
金槌が、信男の唯一残った睾丸に振り下ろされた。
ぐちゃ！

たった一つ残った睾丸は、永遠に破壊された。
信男は仰向けに倒れ、白眼を剥いて烈しく痙攣した。ペニスの尖端から、彼女の歯で穿たれた穴から、人生最後の精液が噴き出していた。
理沙は、満足そうに眺め、笑いながら言った。
「仕上げは完璧にね！」
理沙は、信男のペニスに食いつき、根本から食いちぎった。